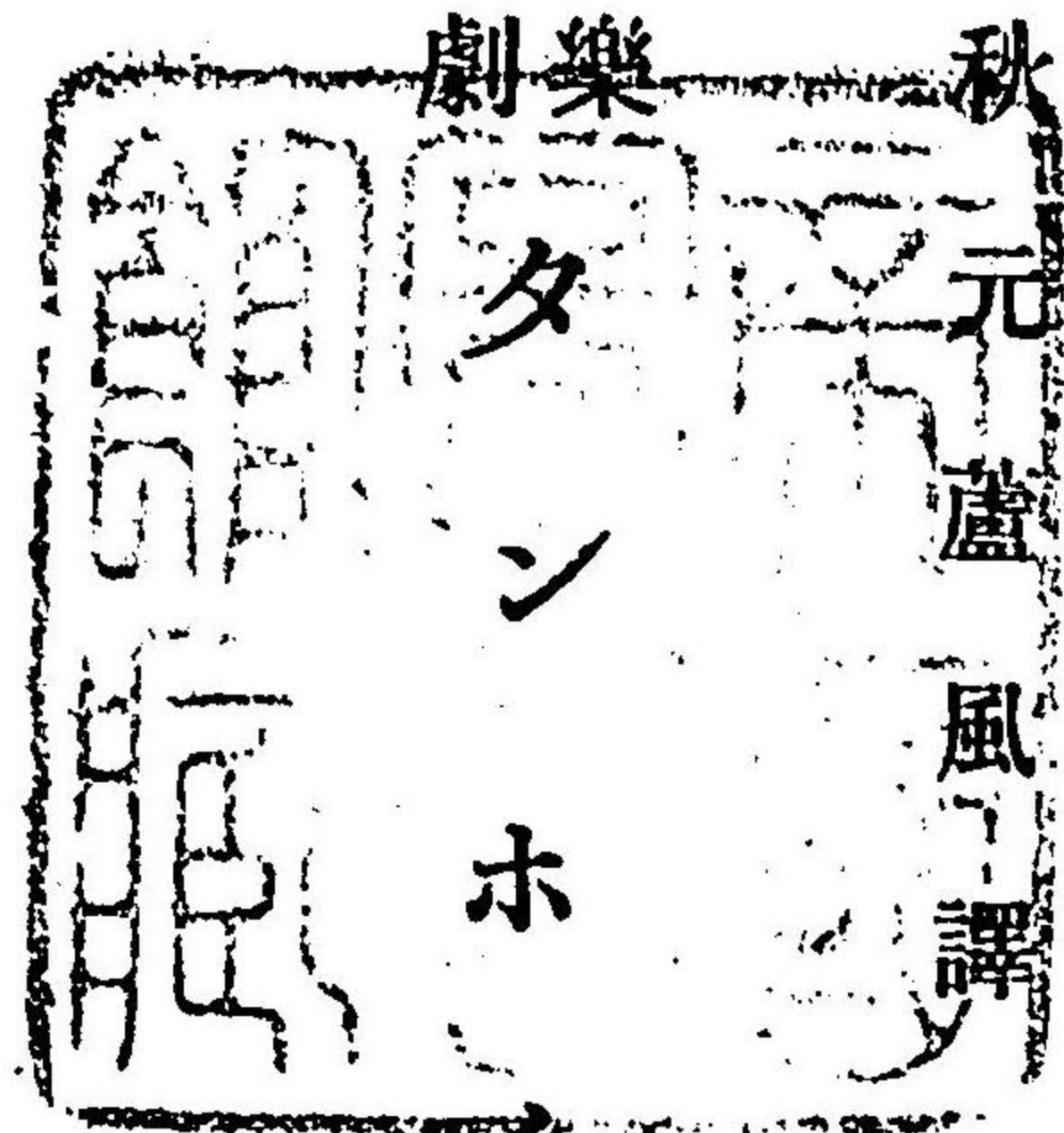


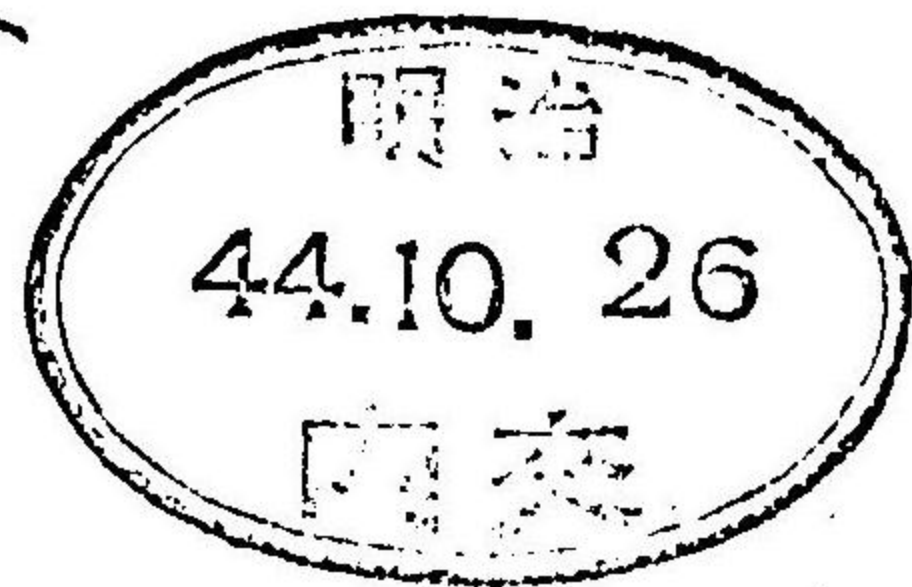
338-47



ワグネル作

イゼ  
ル

全



精  
華  
書  
院



## 例言

- 一、この翻譯の草稿は明治四十年の夏に成つたもので、同年十一月發行の雜誌『心の花』によりて一旦公にされたものだ。
- 二、近く精華書院から、獨逸文藝の第二篇として發行される事になつたので、譯者は右の譯を更に原作と對照して、誤譯は勿論、譯詞譯句の思はしからの節々を訂正或は改譯した。けれども元來翻譯の事であるから、まだ一萬一に飛んだ誤をしてゐる處が無いとも限らぬ。これは、氣が付き次第重版の時を待つて更に訂正したいと思ふ。又殊に斯ういふ風の——七五調を本位とした一種の韻文的翻譯の事であるから、多少の犠牲は到底免れない。原句と對照して、譯句になほ一不滿の多い點は、譯者



と同じく讀者諸君の感じ給ふ處であらうか。自分はこの拙譯が、この譯として、一種の目的を達して居さへすれば、それでよいと思ふ。

三、修正に際して、自分は先づ思ふやうに筆を加へて見た。處が——翻譯當時の氣分と今日の氣分とは違つて居るので、後から讀み返して見ると、木に竹を接いだやうな點が著しく目につく。前後の關係が調和して居ない。第一の修正は失敗に歸したので、自分は第二の修正を改めてした。そして此度は、翻譯當時の氣分といふものを重んじて、誤譯及び甚しく意に満たぬ點の外は、あまり修訂を施さぬ方針にした。従つて、原句の意義に多少は遠ざかつてゐる譯句でも、格別差支のないやうなものは、無理に直譯的の詞句に改めなかつた、前後の關係上、その方が韻文

として句あるからである。斯うした結果が終に斯んなものにならぬ。今若し——少くとも自分の氣に入るやうな譯を得ようと思ふには、どうしても始から全然改譯してかゝらねばならぬ。

四、この翻譯は韻文を以てしたけれども、もと／＼逐行的に原句の意味を出來るだけ忠實に移植しようと思つたものである。たとへ止むを得ざる犠牲は多少有つたにしろ、決して梗概的或は翻譯的にやつたものではない。それで、譯句は大體に於て原句の順序を逐うてゐる。けれども此處には、必ずしも原句と對行的に記してない。譯句の語調その他の都合に基づいて行を切つたので、原作の體裁よりも聊か幅を取つたものとなつて居る。その他の記方は、？！——等の符號に至るまで大抵原作の記方に



基づいた。けれども餘り繁雜な處や、前後の關係に格別重大でない個所は、省いたものが少くない。これらは鎖細な事のやうで、しかも歐文、殊にその詩句の語調、語脈その他の關係を見る上に注意すべき必要がある事と思ふ。原作を對照して見らるゝ者に取りては、尙更らの事である。

## 五、

自分は音樂に暗い者である。だから精確に言へば、樂劇などは翻譯する資格の無い者である。けれども歌詞と歌曲とは、いつたい別の物だ。——元より密接の關係はあるが……そこで自分は、この原作を始め一個の劇詩として味つた。そして、音樂即ち歌曲との關係は兎も角も、これを一個の劇詩として譯した。とは言ふものゝ、此處に見るやうな一種の韻文の形式を用ひて譯出したのは、この作がもと／＼樂劇である事と、従つてその

詞句が韻文である事との爲に外ならない。しかも自分の譯出したこの拙作が、いか程まで歌劇若くは樂劇との交渉を保つかは知らない。——若しそれ、樂劇としての『タンホイゼル』の完全な翻譯に至つては、別に適當な翻譯者に待たねばなるまいと思ふ。自分は、この拙譯によつて、『タンホイゼル』一篇の内容及び形式とワグネル樂劇の一斑を、或る種の讀者に紹介する事が出来れば、それで満足である。

明治四十四年六月四日

修正を終りて

譯

者



(1)

ルゼイホシタ

# 劇樂 タンホイゼル

ワグネル作  
秋元蘆風譯

## 人物

ヘルマン(テューリシゲンの城主)。  
タンホイゼル(騎士にして樂人)。

ラルフラーム・フォン・エッシェンバッハ(同上)。

ワルテル・フォン・デール・フォードルワイデ(同上)。

ピテロルフ(同上)。

ハインリッヒ・デール・シュライベル(同上)。



ラインマール・フォン・ツワイテル(同上)。  
エリザベート(城主の姪)。  
ウエーヌス(女神)。

牧人。

騎士、貴人、貴女。

侍童、侍女。

老若巡禮者の群

ジレーチ、ナヤード、ニユンフェ、バカンティン等妖神  
魔精の群。

場所 テューリングゲン。ワルトブルヒ。

時代 十三世紀の始つ方。

# 第一 段

## 第一 齣

舞臺はウエーヌスベルヒ山中の光景を示す。

### 魔女の歌

岸に寄れかし、

郷に寄れかし、

愛情は熱く燃ゆるなる

雙の腕に身を任せ、

心樂しく休らひなば、

胸の焦情の和むらん。

*That is Japanese style*



第二齣

ウエーヌス  
タンホイゼル

ウエーヌス

語れ、戀人、君がむね!

タンホイゼル

飽きたりな! 飽きたりな!

ウエーヌス

あゝ、われ今や夢より覺めたり。

何をかなやむ、語れかし!

タンホイゼル

夢に聞きけん物の音は、

久しくも耳を離りし、

楽しき鐘の響なりしか、――

あゝ、それを聞かで、いかに久しくなりぬらん。

ウエーヌス

何處へ君の往き給ふ?

タンホイゼル

君おそふものや何?

時や、そもいつならん――

われにえわかす。

日も、月も、――

あゝ、われには絶えて無し。

絶えて日影を仰がねば、

光優しき夜の天の、星をも絶えて仰がねば、

緑は増さる初夏の、小草の色も絶えて見ず。

春をば告ぐる鶯の、楽しき聲も絶えて聞かす。

絶えてまた其の色を、其の聲を

聞くべき時のなかるらん、見るべき時のなかるらん。

*Fill me  
my love!  
your heart!*



ワエーメス

聞くは何?

はて、愚かしの嘆聲よな!

わが戀わざのあやしきに、はやも君の疲れしか、

さてはまた——神てふことを悔いてにか?

樂しと今も覺りつゝ、そのかみの苦惱

はやも君の忘れしか? ——

いで樂人! 琴取りね!

戀をば讚へよ、讚へよ、戀を!

戀の女神の心ひきたる

君がいみじき歌をもて

戀の力を讚へよかし。

歌はおん身を讚ふらむ、

タンホイゼル

われに幸福授けつる、

いともあやしき神力を

われや讚へん——わが歌は、

われに快樂與へたる、

げにありがたき神恩を

歡び呼ばん、聲高く。

あゝ、わが心歡樂の方にあこがれ、

いたくも胸の渴きし其の時、

神ならでは示さざりしものを

生命限のあるわれに

かたじけなくもおん身はめぐみき。

あゝ、さはあれど滅者の身の

Tanphuser



ウエーヌス

われには過ぐる神の戀、  
 神永劫に樂しむとも、  
 われには盡くる命數あり。  
 胸に添ふもの、歡樂のみにあらずして、  
 苦惱をこそは寧ろ願へ、  
 み國を逃れて、いざや辿らん。――  
 女神よ、女王よ、願はくば、  
 われを往かしめ！  
 聞くは何たる歌の音ぞ？  
 歌の調の、などさは悲しき！  
 歡喜の歌をのみ、たゞに捧げし其の靈氣  
 去つて、そも何處に消えし？

タシホイセル

あゝ、又しても我戀の怠りけるは何の故？  
 戀人よ！この身を誰に訴ふる？  
 おん恵こそはげに有りがたけれ！  
 盡きぬ快樂を身に占めて、  
 おん身のそばにありし者、  
 神の腕に抱かれて、  
 永久の愛情を浴びにし者、  
 誰かは戀を讀へざらむ。  
 げに奇しくも心誘ふは御國にて、  
 到る處に歡樂の魔風充ちわたり、  
 廣しといへど地のうへ、いづれの郷か同じ場所を見いづ  
 べ。



ウエーヌス

しかはあれども胸は今  
 薔薇の香かをる郷ならで、  
 すいしき森を慕ふなり、  
 空の蒼きを戀ふるなり、  
 野邊の緑を慕ふなり、  
 小鳥の歌を戀ふるなり、  
 鐘の響を慕ふなり。――  
 御國を逃れて、いざや辿らん。――  
 女神よ、女王よ、願はくは、  
 われを往かしめ！  
 誠あらざる君よ、喃！  
 何をか君の聞かしむる？

タンホイゼル

ウエーヌス

タンホイゼル

ウエーヌス

辱かしめんとや、わが戀を？  
 口には戀を讃ふとも、身は其の戀に逃れんとする――  
 さてもあやしき我戀に  
 君、厭はしうなりにしか？  
 めぐし女神よ、  
 腹立ち給ふな！  
 さてもあやしきわが戀に  
 君、厭はしうなりにしか？  
 餘りに大き御方を  
 逃ればやとこそ思ふなれ！  
 あな、あはれ偽善者よ！謀反者よ！また不知恩者よ！  
 君をばわれの放たねば、



タンホイゼル

ウエーメス

君は往く事叶ふまじ。  
袂を分ち、永劫に

おん身が許を往くなれば、  
今に勝らん思とてなく、  
今に越したる誠あらんや。

来れ、戀人！

見よや、かの

薔薇の薫の吹き通ふ、いと、  
樂しき洞をしも。

その樂しさにあこがれて、  
神さへ民を止むらむ

いと、あやしき郷に来て、  
柔き褥に憩ひなば、

足の疲勞はやがて消え、

すいしき風のそよぐと

熱き首を吹きさまし、

樂しき光輝やかに

君が胸にぞ溢るべき。

又遠方ゆ聞え来る、たのしき天の樂の音は、  
君をば胸に近寄せて、腕捲けとや誘ふらむ。

互に合す接吻に、甘き神露を君すゝり、

わが眼差は輝きて、君に光を送るべし。――

かくて成りぬる祝ひ事、

戀の祭を祝はんに、

などかは恐るゝ事あらん。



魔女の歌

ウエーヌス

タシホイセル

戀の女神ともろともに  
思ふがまゝに楽しめよ！

岸に寄れかし！

郷に寄れかし！

騎士よ、わが戀人よ！

逃げんと君のし給ふか？

永久に響かむ、わが歌は

おん身の爲に永久に響かむ。

歌こそ高く若身をば、讀へまつらん者は我なり。

げに嬋妍の御姿は

美しくきもの淵源にて、

奇しき事の數々は

おん身よりぞ出るなる。

又は火焰とさながらに

わが胸を射し光明は、

おん身にのみぞ輝かん。

いで、今よりは御身の爲

世と戦はん——われや雄々しの武士と。

さはれ往かんは人間の國！

神のみそばに侍るとも、

身は唯賤しき奴僕のみ。

自由をこそはひた願へ、

自由にこそはあこがるれ。

たとひ生命は捨つども、生死を塔けて



ウエーメス

戦争の場にわれや立たなん、——  
 み國を逃れて、さらば辿らん。——  
 女神よ、女王よ、願はくば、われを往かしめ！  
 往さね、迷へる者よ！  
 この身は君を留めねば、  
 往さね、彼方へ！思ふがまゝに  
 住きて運命を終へよかし。  
 往さね、冷たき人間の界へ！  
 かゝる迷へる者の前  
 われらは往かん、地深く  
 暖かき界へ逃るべし。  
 往さね、迷へる者よ！

タンホイゼル

往きて索めよ、幸福を！  
 索めよ、幸を——かくて又  
 とはに見いでじ、幸福を。  
 やがて心もひるむべく、  
 身を賤しめて、わが方へ  
 またもや君の寄りて來む。——  
 路行きなやみ、よろくと  
 われをば君の尋ねらむ。  
 あやしき神の御力を  
 ふたゝび君の願ふべし。  
 愛しの女神よ！いざさらば、  
 われ永久に還るまじ。



ウエーヌス

とこしへ君の還らぬか……

ふたゝび君の還らねば、

われ呪はまし人間の群！

君よ、ふたゝび徒らに、

索めよ、神のみ力を！

世は寂しげに益荒雄も

奴僕たるべし、人間の界に。――

歸れ、ふたゝびわが許へ！

戀の快樂もとこしへに

われに徒なり。

かへれ、再び！

君の心の向ふとき――

タンホイゼル

ウエーヌス

タンホイゼル

おん身が戀んとこしへに  
御國逃れん。

ウエーヌス

世に行く路のあらざらば？  
罪をば悔いて、

ウエーヌス

追はれし身をば救はれなん。  
赦免永久に叶ふまじ、――

タンホイゼル

かへれ、ふたゝび！  
君が幸福あらざらん。

タンホイゼル

わが身の幸は  
マリヤにこそ！



第三齣

牧人

花咲く野路を辿らんと  
 山出でたすホルダ姫、  
 あやしひいきの聞え来つ、  
 眼はその方にあこがれぬ、  
 楽しい夢はふと覺めつ、

タンホイゼル

牧人

巡

禮

テューリンゲンの谷間  
 背面にワルトブルヒの城

老巡禮の歌

眼をやゝに見ひらくや、  
 射す日の光はあたゝけく、  
 春は来りぬ、春は来ぬ。  
 いざや、楽しく野の末に  
 吹きぞすすまん、牧の笛。――  
 たのしき五月、春は来ぬ。  
 イエズス、クリスト、わが主よ！  
 われはおん身の方さして、  
 路をばたどる旅の者。  
 きよき聖母をたゝへなん  
 わが行く路の安かれな！  
 犯しゝ罪の重くして、



牧人

タンホイゼル

巡禮の歌

身はその責に堪へぬなり。  
 されば思の安からず、  
 懊惱は胸に迫るかな！  
 慈悲は厚き神の前  
 罪ある身をば贖はん、  
 誠實を主に盡すもの、  
 懺悔に其の身を救はれん。

ロトマをさして、いざや、いざ！

祈れ、あはれの者のため！

慈悲あまねきおん神を

讃へまつらん、あゝ、主よ！

イエズス、クリスト、わが主よ！

タンホイゼル

巡禮の歌

われはおん身の方さして、  
 路をばたどる旅の者、  
 きよき聖母をたたへなん、  
 わが行く路の安かれな！  
 犯し、罪の重くして、  
 身はその責に堪へぬなり。  
 されば思の安からず、  
 懊惱は胸に迫るかな！  
 慈悲は厚き神の前  
 罪ある身をば贖はん。  
 誠實を主に盡す者  
 懺悔にその身を救はれん。



第四齣

城主

誰ぞや、かしこに

タン  
ホイゼ  
ル  
城主  
樂人の群

アルテル

心亂さず祈禱する者？  
懺悔者ならん。

ピテロルフ

其の姿の騎士にぞ似たる。

ナルフラーム

彼ぞそは！

樂人及び城主

ハインリッヒよ、ハインリッヒよ、  
誤あらじ。

城主

げに眼のあやまたず、――

ピテロルフ

いつぞや、其方が振り捨てたる  
群にとまたも還れるか？

城主及び樂人  
(ピテロルフを除く)

かたれ、還れる其の次第を！

ピテロルフ

かたれ、われらに！  
赦免請はんと來れるか？

アルテル

争闘せんと來れるか？  
與せんとてや近づける、

樂人  
(ナルフラームを除く)

敵せんとてや近づける？  
敵せんとてや？

ナルフラーム

問ふを罷めよ！

そは誇らしの所業かよ？――



アルテル

いざ、いざ、來れ！  
われらが許に！  
來れ、樂人！久しくも  
君はわれらに別れたる。

ピテロルフ

君おだやかに來んとならば、  
いざ、いざ、來れ！  
友とわれらと呼ばふならば、  
いざ、いざ、來れ！

樂人の群

いざ、いざ、來れ、  
われらが許に！

城主

いざ、いざ、來れ！  
かくも久しく何處を汝のさまよへる。

タンホイゼル

われに休息の絶えて無き、  
いと遙けきその方を

われはさまよひ歸り來ぬ。――  
さればな問ひそ！われは、今

戈を君等に向けんとて、來れる者にはこれあらず。  
願ふは、この身を御免ありて、

城主

なほ我が旅に就かしめよ！  
否、否！その身は今茲に

アルテル

われらが群に入りにしを！  
君は往く事叶ふまじ。

ピテロルフ

われらは君の足止めん、

城主及び樂人(ピテロルフを除く)

止まりたまへ！



タンホイゼル

城主及び樂人

タンホイゼル

樂人

ナルフラーム

タンホイゼル

留むるも何の効かある！

暫時の違も無きわれに

旅ゆく路の急かるれば、

後ふりむく暇を無き。

暫時といまれ、旅の者！

われらは君の足止めん。

ふたゝび此處に廻り來て、

などさは疾く往き給ふ？

いざ、いざ、往かん！

居れ、居れ、此處に！

エリザベートが許に居れ！

エリザベートな——

ナルフラーム

城主

ナルフラーム

あはれ神力！われにゆかしき名を呼ぶや？

わが殿！

おん叱責は、ゆめあるまじきぞ！

ねがふは此の身友のために、

彼が幸を知らせてん。

彼が行ひし魔術を

彼に名のれ！——

神よ！願はくば、徳を彼に賜へ、

その身の魔を免るるやう——

げに技競べせしかの折に、

すぐれし君が歌わざの、

われらが中の第一と、



勝利を得たりしそののみかや、  
心氣高き手弱女が魂をも奪へる、かの力――

それやそも、眞の技藝の力なりしか？

さては又、あやしの術にてありつるか？

あゝ、げに君の往いてより、

われらが歌ふ歌の音に、

少女の胸は慰まず、

次第に頬の色褪せて、

姿は絶て現はれず。――

かへれ、樂人！ 又此處に！

君が妙なる歌の音を

われらが許に響かせよ！

樂人

饗宴の際に手弱女が

姿は永久に現はれむ！

裝飾の星のきらゝかに

またも吾等を照らすらむ。

止まれ、わが友！

吾等が許に

ふたゝび君の歸れかし。

爭論を果てしめよ！

歌をば歌へ、もろともに！

われらを呼びね、友としも。

あゝ、その方へ、その方へ、

われを往かせよ、その方へ！

ナンホイセル



## 城主及び樂人

ひとたびわれの振り捨てし  
 たのしき郷は見ゆるかな。  
 天はのどかに輝やきつ、  
 地は花をば着飾りつ、  
 春のひきは樂しげに  
 深くも心に傳ひつゝ、  
 とやめもかぬる憧憬に  
 叫ぶよ、胸は、「其方へ」と。  
 姿久しく見えざりし、  
 彼は再び歸り來ぬ。  
 あやしき神のみ方は、  
 彼をばまたも誘ひたり。

ひいけよーさらば、茲に又  
 神を讃する歌の聲。  
 高く唱ふる其の聲を  
 神は聞くべし、茲に又。  
 たのしき歌は諸人の  
 胸りよ湧かん、又茲に。

(第一段終)



第二一段

第一齣

エリザベート

ワルトブルと城内の樂堂  
またも相見る、たふとき堂よ！

またも相見る、ゆかしの室よ！

ふたゝび響くかの歌は

悲しきわれを呼びさます。――

君往きましし其跡の

汝が寂しさや、いかなりし。

しづかごころの我になく、

たのしおもひの汝になく。――

第二齣

あゝ、さはあれど又茲に

わが胸高く揚るごと、

汝が姿のほこらしき。

われらを斯くも覺ましつる

君こそ在らめ、永久に！

あはれ、たふとき此の堂よ！

あはれ、ゆかしの此の室よ！

エリザベート  
タンホイゼル  
ワルトム



ナルフラーム

少女ぞ在るに、——その方へ、

いざ、ためらはずで寄りたまへ！

タンホイゼル

あはれ、姫君！

エリザベート

あな、君よ——面を上げね！

誰そや、姿の見えざるに。

タンホイゼル

待ちませ、暫時！

君がみそばに寄らしめよ！

エリザベート

さば、あげ給へ、面をば！

何伏し給ふ、此處にして？

此室ぞ君等が王國なるに。

面を向けて歸り來し

君等迎ふるわれをば見ませ。——

タンホイゼル

さても久しく何處に在りし、わが君の？

郷をば離れ、いや遠く、

遠く遙けきその郷に。

昨日も今日もわかなくに、時をば忘れ、

回想といふ回想はみな消え果てつ、

思ふはたゞにひとりの事。

再び此處に來べしとは、

またも眼を上げんとは、

思はざりしよ、絶えてまた。——

エリザベート

然らば、君のいかにして、

再び此處に來給ひしぞ？

タンホイゼル

そは不思議よな！



エリザベート

まことあやしき神のわざ！

まことあやしき神わざを

心よりわれや讃へん。

げにあやしさを偲ぶれば

力氣は失せつ、さながらに

夢見るとき心地して、

幼児よりもおろかしく、

せんすべをだに知らねども

願ふは、この身を免させて、

胸の疑惑を霧らさせよ。――

いつもながらに樂人が

奏でし琴のその調、

歌のひびきの面白く、

耳傾けて聞きにしかど、

更にも増してわが胸に

對へし歌のいかばかり

あらたの響傳へけん。

苦しみ身をば襲ふごと、

樂しみ胸に迫るごと、

嘗て觸れざるその感覺！

嘗て知らざるその慾望！

何ともわかぬ嬉しさに、

嘗てたのしと思ひけん

事みながらに消え失せつ。――



タンホイゼル

君わが許を去りてより  
 身の樂しみは消え失せつ、  
 そのうち歌ふ樂人が  
 歌の心は悲しげに、  
 調も頼に弱り果て、  
 夢にも覺る苦しみや、  
 覺めても胸のわびしくて、  
 快樂は身をば去りけるよ。――  
 あはれ樂人！  
 この身に何を爲しつるぞ？  
 戀の御神を讃へよかし。  
 琴に其の身を觸れましし、

エリザベート

タンホイゼル

歌もて君を動かしし  
 われを御側に誘ひてし、  
 戀の御神を！  
 讃へまつらんこの時を、  
 讃へまつらん御力を、  
 君を送りて、わが爲めに  
 嬉しき報知もたらしし。  
 樂しき光輝やかに  
 天つ日影も美はしく、  
 よろこび更に身に占めて、  
 心も今やあたらしき。  
 讃へまつらんこの時を、



ナルフرائم

讚へまつらん御力を、  
御言葉借りて、わが爲めに  
樂しき報知もたらしよ。  
新に來る後の世に  
勇みて身をも捧ぐべく、  
奇しき術を身に占めて、  
樂しき胸の震はしき。  
新に來る後の世に  
希望の光絶えて無き。

第三齣

城 エリザベート  
主

城 主

エリザベート

エリザベート

城 主

あはれ久しく汝が姿見ざりし、  
此處に汝と又遇ふや、  
この日催す歌の祭の  
終に汝を招びぬるか。  
あはれ、伯父君！  
情も厚きわが父よ！  
胸をば終に打開くべく、  
汝、心の迫れるか？  
眼をこそ見ませ、  
物言ふ事の叶はぬよ！  
なほも口をばつぐませて、  
暫時あるべし、汝が秘密。



やがて其の罪露るゝまで  
 解けであるべし、魔のしわざ。  
 さはあれ歌のけふもまた  
 あやしき力あらはして、  
 榮ある終告げぬべし。  
 樂しき歌のわざくらべ、  
 今より此處に始まらん。  
 招き寄せつる諸々の  
 貴人はやも集まりぬ。  
 けふ珍らしの、この盛典、  
 汝が出づとしも打聞きて、  
 常にも増すや、人の數。

第 四 齣

城 主

エリザベート

樂人、騎士、貴人貴女

合 唱

いざ、もろともに歡びて、  
 技術と平和の常憩ふ、  
 樂しき聲の久響く  
 尊き樂堂を迎へなん。  
 われらが君よ、幸くませ！  
 城主ヘルマン、八千代ませ！



城主

あはれ愛しの樂人よ！  
 汝等が歌の響によりて、  
 寂しかりしこの室の  
 賑はしうもなりしかな。  
 たのしき樂の音と共に  
 われらが胸のたのしさよ。――  
 君の爲とて同胞が國の戦に出る時、  
 烈しき敵の攻撃を 力を籠めて防ぐ時、  
 危難に充つる争鬪を 力を併せ防ぐ時、  
 汝等が歌のわざにより 數多の功績は成されけり。  
 愛のため、又道のため、  
 信のため、又義のために、

めでたき勝利を得たりしも、  
 げに又歌のわざなれや。――  
 永く別れし樂人が 歸れる今日を幸ひにいざ、歌の祭や  
 催さん。  
 再び彼が來れるに、必ずや深き秘密の籠るらん。  
 歌力を以て、  
 隠るゝ仔細解くべきぞ。  
 此處にわが置くひとつの問題、  
 誰か能く「戀」の真相を言ふ者ぞ？  
 讀むべき答をなさん者に、  
 姫は懸けなん、讚言葉。  
 榮譽を願ふ者のため



姫は希望を得さすらん。  
いで、樂人、琴取りね！

問題に答へよ！榮譽のために  
競うて勝利得よ、まづ第一に  
けふの祭の勝者たれ！

騎士及び貴女の合唱 吾等が君よ、八千代ませ！

詩歌の保護者よ、幸くませ！

四人の侍童

ナルフラーム

ナルフラーム・フォン・エツシエンバッツハまづ言ひ給へ！  
四邊の光景を眺むれば、

あゝ、うるはしや、この集合。

そこに居並ぶ武士の、雄々しく、猛く、殿めしき。――  
櫛の林のうるはしく、緑さやけく、新らしき。

又は優しく、おとなしの婦女の群。――

さては匂も香ばしく、色美しき花の束。

かゝる煌ゆき光景に

酔ひてぞ眩む、わが眼。

黙して偲む、われの歌。――

かくて仰ぐは唯びとつ、

光まばゆき天つ星

精神はこれに集まりつ、

何とは知らぬ尊さに

おのづと沈む、わが心。

茲にわれ見る奇しの泉、

精神はこれにあこがれつ。



恵あまねき歡樂を水より汲みて、  
精神は胸を慰むる。

さればわが身は永久に  
など濁さんや、その泉。

汚れしわれの心もて

などかは觸れん、源を。

永久に生命を捧げつゝ、

靈の泉やをろがまん。――

さば、君達！

かくも費す言葉によりて、

『戀』の真相の潔さを言ひたる

わが心をば知りつべし。

騎士及び貴人の群

然なりや！然なり！

君が歌にぞ賞讃あれ！

タンホイゼル

ラルフラームよ！

幸なるかなや、われも亦

君が見きてふ泉をば知る。

そを知りてならぬ者としてあるべきか？

聞さね、わが友！

われ其の徳を讃へん。――

泉に近く寄り添ふ毎に

胸には堪へぬ憧憬や、

熱き渦を鎮めんに

われその水に唇觸れつ、



思は茲になだめられ、  
聊の恐怖をだにも思ほえず、

思のまゝにわれは呑む。

されど泉の盡きざるは、

胸に湧くなる慾望の

永久に絶えぬと宛然や、

慾望盡きざるその間

泉にわれは寄り添ひて、

胸の思を慰むる。――

『戀』の真相の何なるか、

わが見るところは斯くのごと。

ワルテ  
ワルフラムが名くるその泉を

わが心もまた見る。

さはれ、ハイソツヒよ！

そを見て胸を燃やしたりてふ

君こそは、まことそを識らぬ者なれ。

されば、われ君に教へん、君に言はんか。

泉とは、それ徳の謂ぞ。

君よ、そを心より尊め。

清浄なる其の爲に、生命をも捧ぐべし。

はしたなき情慾を慰めんとて、

その水に唇觸れんはおろかや、

渚に唇を寄せてだに、

靈の力は永久に消えなんものを。



聴衆

タンホイゼル

泉に慰藉を汲まんとならば、

君よ、心のなぐさめ得よ、

ゆめ顎を濕ほさんとは。

然なり、ワルテル！

君が歌にぞ榮譽あれ！

かくも歌ふか、ワルテル！

君こそは、まこと「戀」を曲げて説く者！

かゝる願にわづらひて在らむには、

此世に何をかも得ん。

遠なる神を稱ふべく、

空うち仰げ、星をば見よ、

君そを觸れてならぬゆえ、

ピテロルフ

かゝる不思議をたゞ祈れ！

さもあらばあれ、

觸るゝを望んで自から屈し、

胸元寄せて近づく者、

生れの元を同じうして

形なよやか、媚をば示す其の者より

歡樂を享けんは、

まこと適はしきぞ。

かくてわれ

快樂にこそ戀を知れ。

來りて、われらと戦へ！

汝が言葉うち聞くもの、



誰か又容赦あらんや！  
撃つて懲さん、汝が無禮！  
無禮の者よ、承はれ！

畏くも戀のおん神この身を勵まし給は  
武勇を以てわが劍を磨き給はん。  
神の耻辱を永久に絶つべく、  
われ喜んでわが血濺がん。

婦女のため、又道義のため、  
劍を以て、われ武士の義務を果さん。  
さもあらばあれ、

汝が得たる青春の快樂、  
あはれ、そも一撃の價値あらんや。

聽衆

タンホイセル

君を祝はん、ピテロルフ！

われらが劍こゝに在り。

さても何たる大言！

汝おろかなるピテロルフよ、

之を以て、汝戀を歌ふとなすか？

あはれ恐らくは、わが樂しとなすものを、  
知らずしての汝が暴言。

あゝ、不慙なる者よ！

汝、何者をか味ひたる？

戀には貧しき汝が生涯

汝が受けにし歡樂こそ

げに、一撃の價値なからめ！



騎士

城主

ナルフラーム

彼をば勵ませ、――

勇ある彼に加擔せよ！

劍をば收めよ、――

樂人どもよ、靜かなれ！

あはれ御神！ねがはくは、

わが讃歌を聞かしめ給へ！

尊く、清き集合より

罪業をば拂ひ除けさせよ！

天つ使の美はしさ、

深くも胸に泌み入りし、

戀の御神よ！おん身のために

高く響かん、われの歌。

タンホイゼル

神の使と天降りたる

御身の後をわれは追ひ、

永劫星の影照らす

國へと、われの導かれゆく。

戀の女神のおん爲めに

今ぞ響かんわれの歌、

君を讃ふる歌の音を

聲高らかに揚げしめよ。

げになよやかなの御姿は

美しきもの、淵源にて、

奇しき事の數々は

おん身よりぞ出るなる。



一同

思を胸に燃やしつゝ、  
腕かひなに神を捲きてこそ  
始めて知らめ、眞の戀。  
神を抱きし者ならで、  
誰かは知らめ、又戀を。――  
されば、汝等、戀をば知らぬあはれの者よ！  
往きね！

ウエーヌス住すまふかの山に。

女神ウエヌスの山に在りしとは、

さて呪はしや、

彼が五體に遠ざかれ！

汚れし者に遠ざかれ！

貴女ノ群

城主、騎士、  
及び樂人

エリザベート

城主、騎士、  
及び樂人

皆人みなびとが聞くらむ如く、  
汚れし者の口よりして、

今、其罪は言はれぬ。

地獄の幸さいを味はひて、

ウエヌスのみ山に在りきとよ。――

あな、恐ろしや、厭はしや、

さては呪はしきかな、

劍つるぎを以て彼奴かれめを切れ！

汚れし者を遠ざけて、

地獄の果はに追ひ返せ！

おん待ちあれな！

エリザベート！



エリザベート

何たる言葉ぞ？  
罪人に節操を立つるわが少女  
おん身等よ、其處退き給へ！  
日頃生命は惜まぬ身！  
おん身等の劍の傷が  
彼より受けし死傷に較べ、  
いか程の事あらん？

城主、騎士、  
及び樂人

何をか聞かする？

恐ろしうも汝の心惑はしつる者より  
罪業をうけがふとは、  
さて、おろかなる汝が心。

エリザベード

わが身は兎まれ——  
心にかゝるかの君よ！

城主、騎士、  
及び樂人

さてもおん身等、かの君の  
幸福をば永久に奪ふとや？  
希望は一切叶はぬ身の  
彼に幸福あるべきか。

エリザベート

天の呪咀を受けたる彼  
罪に果つべき身ならぬか。  
殘忍かる者よ、そこ退き給へ！  
彼をば正さんおん身等ならじ。  
持てる劍を打捨てて、清き少女に聞き給へ、  
やさしき者の口により、神の御言葉聞き給へ。——



奇し魔術にみいられし  
 あはれ罪人——彼とても  
 その身の罪を悔いなんに、  
 容赦かなはぬ道理ありや。  
 敬虔厚かるおん身等の、  
 神のおほせを、など否む。  
 彼が希望を絶たまくば、  
 まづ言ひ給へ、おん身等に  
 何をか彼の爲しつるぞ。  
 心に深く彼を戀ひ、  
 胸をば彼に撃たれたる、  
 彼に花をば手折らしし、

タンホイゼル  
 城主、騎士及樂人

若き此身を偲びませ。  
 ねがふは、たゞに君のため、  
 身を安かれと祈るかな、  
 その身の罪を悟りつゝ、  
 彼を旅路に就かしめよ、  
 神をうやまふ心をば  
 高くも彼に起させよ。  
 不慙なるかな、あゝ、この身！  
 尊き神詫告げんとて、  
 光まばゆき虚空より  
 天つ使は現はれぬ。  
 仰げ、みそらを、罪人よ！



タンホイゼル

汝が罪を悟れかし。  
 あはれ、少女は  
 汝が生命を救はんと  
 神にその身を捧げたり。  
 天使の願を聞く者の、  
 誰かは心たまざる。  
 汝が罪赦し能はずとも、  
 神の御言葉いかで背かん。  
 罪ある者を救はんと、  
 天つ使は寄りましぬ。  
 尊き姿迎ふるに、  
 汚れしわれの恥かしや。

城主

あゝ、願はくば、天つ神！  
 あはれと思せ、この身をば。  
 あまりに罪の恥かしく、  
 天つ使を知らざりし、  
 われをあはれと思しめせ！  
 罪ある者を救ふべく、  
 使者を賜びしわが神よ！  
 あゝ、恐ろしき罪は爲されぬ。――  
 呪咀を負へる罪の子は  
 われらが眼をば偽りぬ。――  
 いざ、われ汝を追ひ拂はん、  
 罪ある者よ、此處をば去れ。



城夫騎士及樂人

出で立つ群ともどもに  
 慈悲の市へ向へかし。  
 塵に汝が身をひれ伏して  
 罪をば悔いよ、神の前。  
 神の宣託をなす者が  
 前にその身をひざまづけ。  
 若し御恵のあらざらば、

まだ此の谷を出でやらず。  
 罪を免れん一念に  
 安き思のさらに無く、  
 悔のなやみをしづめんと、  
 ローマをさして人の行く。

罪をば犯せる汝によりて、  
 われらが家や汚れん。  
 汝を容るゝ此屋の上より  
 天つ御神ぞおびやかす。  
 その身の難を免れんに、  
 こゝに一つの路あれば、  
 其處より出で、身をば逃れよ！  
 旅に出で立つ巡禮の  
 群は四方より集ひたり。  
 老いたる者の一群は  
 はや此の里と別れしが、  
 年なほ若き一群は



エリサベイト

な歸り來るところはに  
天つ使の破りたる、  
仇をば汝の避くべきぞ。  
その身の罪を守りなば、  
汝に降らん、この劍。  
慈悲の御神よ、彼をして  
おん身の許へ行かしめよ。  
伏しておろがむ者のため  
その罪赦し給へかし。  
願ふは、たゞに彼のため  
生命を擧げて祈るなり。  
その身の闇に消えぬうち、

タンホイセル

光明を彼に見せしめよ。  
われ歎びてこの身をば、  
犠牲と捧げむ人のため、  
生命は神に捧げなむ、  
この身はわれのものならず。  
慈悲をいかで見いづべき？  
いかで免れんわが罪を？  
あゝ、わが幸は消え果てぬ。  
神の恵は消え果てぬ。  
さはあれ容赦乞はんため、  
旅ゆく者の後追ひで  
悔の旅路に向ふべし、



塵にこの身をひれ伏され。  
よしわが幸は滅ぶとも、  
願ふは、たゞに彼女のため、  
天つ使と現はれて、  
その身を神に捧げたる  
彼をば許せ、わが神よ！

年若き巡禮の歌

恵はあつき神の前  
罪ある身をば贖はむ。

誠實を主に盡す者

懺悔に其の身を救はれむ。

メンホイゼル

ローマをさして！

一同

ローマをさして！

(第二段終)

### 第三段

#### 第一齣

ヘルゼルベルヒの左方  
ワルトブルヒ城前の谷地  
エリザベート  
ラルフラーム  
老巡禮の一群

ラルフラーム

森をば出でてわれひとり谷間に下り、  
此處其處をさまよふ折節、

いつもく見いづるは、姿優しき姫のみすがた。

祈禱あぐるに餘念なき、



かの姿をば今日も見らん。――

生命をば捧げまつりて、

晝となく、又夜となく、

行きにし彼の幸福を

心に深くしのびつゝ。

今日か明日かと只管に指折るかぞへ、

家路に向ふ巡禮の、歸りを唯に待ちわびつ。――

疾くも秋の風立ちて、木の葉散り布き、

はやも歸りの近づけば、

彼が恵や如何にぞと、思ひわづらふ姫が心のあはれさ

よ。――

胸なる傷のよし療えずとも、

エリザベート

オルフラム

あはれおん神！

姫が希望を遂げさせ給へ！

彼女に休息を授けませ！

そは、かの歌ぞ！――巡禮は

今、ふる郷に着けるなり。

神よ、務をこの身に賜へ！

われ其つとめを果さんに。

そは巡禮ぞ！――聞ゆるは、

神の恵を告げ知らす

彼等がうたふ歌の聲。

神よ、心を勵まし給へ！

彼女が生命の分れどき。



老巡禮の歌

あゝ、故郷よ、うれしくも  
 またも汝と相見るか。  
 汝、ゆかしの草原よ、  
 嬉しやまたも此處に遇ふ。  
 神をろがみて歸れるに、  
 今、旅杖を置かしめよ。  
 神の御前に罪をば悔いて、  
 われはその身を救ひたり。  
 おほけなき神の恵は  
 悔人に與へられつよ。  
 されば響くよ、この歌も  
 恵をうけし者のため。

エリザベート  
老巡禮の歌

かくて恵を得し者が  
 未來の旅の安らげく、  
 地獄の門に、死の前に  
 何の恐怖もなからまし。  
 生命續かんその極み、  
 されば讃へん神恵を、  
 神よ安かれ、とことばに！  
 神よ安かれ、とことばに！  
 かへり來まます、かの人は――  
 あゝふる郷よ、うれしくも  
 またも汝と相見るか。  
 汝、ゆかしの草原よ、



嬉しや、茲にまたも遇ふ。

神をろがみて歸れるに、

今、旅杖を置かしめよ。

神の御前に罪をば悔いて、

われはその身を救ひたり。

おほけなき神の恵は

悔人に與へられつよ。

されば響くよ、この歌も

恵を享けし者のため。

かくて恵を得し者が

未來の旅の安らげく、

地獄の門に、死の前に

エリサベト

何の恐怖もなからまし。

生命續かんその極み、

されば讚へん、神恵を。

神よ、安かれ、とことばに！

神よ、安かれ、とことばに！

方あまねきわが女神よ、

願はくは、この身の願容れ給へ、

君が御前に死なしめよ。

わが身を奪へこの世より、

身を汚れなく、天使の如

君が御國に行かしめよ。

あゝ、わが心おろかにも



迷誤まよひの爲に捉はれて、  
この世の慾望のぞみ湧き立ちつ、  
悪しき願望ねがひの起りし時、  
かゝる思をしづめむと  
われは甚いたくも争ひぬ。

しかはあれども、あゝ、われの  
その過あやまちを悔いかねつ。――  
されば願ふは、わが神の  
この身の願ねがひを聞き入れまし、  
この身を神の婢女めかけと  
おん身の側そばに行かしめ給へ！

ナルフラーム

願ふは、たゞにかの人の  
罪の容赦ゆるぎを乞はんため。――  
姫よ、おん伴とも叶まじきか？

第二齣

ナルフラーム

死を想おもはせて黄昏たそがれは大地だいちを掩おほひ、  
黒色くろいろの喪服もくふく纏まとひつ、谷をば包むをりからを、  
幽闇ゆうあんと恐怖おそれを横よこざりて、天あまつ御空みそらに翔からんと、  
おもひわづらふ靈魂ひたまや。  
この時、汝いまし、星影ほしかげは、優やさしき光ひかりきらめかし、暗くらを照てらし  
つ、

谷間たにまをいでて行く靈たまの、天あまつ旅路りょじの道みちしるべ――。



あはれ、優しき星影よ、  
 夜毎夜毎に現はれて、  
 わが打仰ぐ夕づつよ、  
 この世をはなれ、人霊の、  
 天つみ國に到らんと、  
 谷をは出でて迷ふ時、  
 汝がほとり行きもせば、  
 迎へよ、靈を天つ星影。

第三齣

ヲルフラーム  
 タンホイゼル  
 遅れて、ウエーヌス  
 衆人の群

老若巡禮者の一群

タンホイゼル  
 今、わが聞きつる琴の調の、いかに悲しかりしぞ。――  
 そは、よもや、おん身等がわざにてあらざらん。  
 ナルフラーム  
 ひとり寂しく路をば辿る、  
 おん身は誰ぞや？ 旅の者！  
 タンホイゼル  
 この身をば誰とか見給ふ？



ナルフラーム

われはおん身をかねて知る——  
君は、樂人、ラルフラムにはあらざるか。

ナルフラーム

ハインリツヒにて在りつるか。

何故、此處へ近づける？

かたれ、その次第！  
なほも容赦叶はずに、足をばこの地に踏み入るゝか？

タンホイゼル

な煩ひそ、わが友よ！——

君を尋ぬるこの身にあらず。

又君の儕輩の一人をも尋ぬる我ならず。

嘗ては易く見いでつる、かの路をしも、知らする者を索

むるなり。——

ナルフラーム

何處へ行かん路なりや？

タンホイゼル

ウエヌスの山に通ふなる！

ナルフラーム

耳をな汚しそ、恐ろしの者！

行かんとするかその方へ？

路をば君の知り給ふや？

ナルフラーム

迷へる者よ！

聞くも恐ろし、その言葉！

いづこに君の在せしぞ？

ローマへは、君の行かざりしか？

タンホイゼル

われにな言ひそ、その事を！

ナルフラーム

神祭の場に在ちざりしか？

タンホイゼル

われにな言ひそ、その事を！

ナルフラーム

然らば、君の在らざりし？



タンホイゼル

かたれ、いざ！

ナルフラーム

ローマの市にわれも在りしよ！

タンホイゼル

然らば、語れ、幸なき者よ！

ナルフラーム

歸れる次第を物語れ、

タンホイゼル

君をあはれと思ふかな。

ナルフラーム

何とかのたまふ？ フルフラーム

タンホイゼル

君は持たぬか、仇心？

ナルフラーム

君を清しと思ふうち、

タンホイゼル

あだしこゝろの絶えてなし。――

ナルフラーム

然らば、かたれ、旅の様！

タンホイゼル

いざされば、語り聞かせん、

その様を。

フルフラームよ、聞き給へ！

われが旅路の物語。

いざや、語らん。

わが在る地の汚るれば、

友よ、其處をば退きて、

わが物語聞き給へ！

この身は罪人、罪をば悔いて、

わが爲泣きにし天使の爲めに、

涙を和らけ、幸を乞はんと、

胸には堪へざる憧憬抱きつ、

ローマをさしてぞ辿り行きける。――

道行き疲れて旅の友が、



天使の涙をなだむべく、  
 ひたすらこの身の罪を悔いんと  
 かゝる事をも物とせず、――  
 やがては來ぬるかの聖地や、  
 ローマの市へ着ぬれば、  
 神の宮居に身を伏せぬ。――  
 こゝにその日も明けぬれば、  
 折からひびく鐘の音や、  
 讚美の歌の聞ゆるに、  
 神の恵をよるこびて、  
 人々此處にどよめきぬ。――  
 やがて神託をなす者が、

なやめる時だにわが足軽く、  
 牧場の柔地友が踏むとき、  
 われは跣足に石踏みしだき、――  
 わが友泉に口うるほせば、  
 日影の熱きをわれは忍びつ、――  
 祈禱を友が唯捧ぐるに、  
 神をば讃ふとわれ血を滌ぎ、――  
 疲れし者が小舎へ憩へば、  
 われは手足を雪に埋めつ、――  
 恵は見ぬやう、眼もつぶりて、  
 縁はさやけき伊太利の野を、  
 宛然盲者とわれは行きたり。――



姿の其處に見えし時、  
塵に額づく人の群。

神の恵を蒙りて、

人々罪を赦されぬ。――

されば、この身も亦其處に

首を地に押しあてて

苦しき胸を壓へつゝ、

その身の罪を免るべく、

おもひなやみてひたすらに、

恵を神に請ひけるに、

神詔は此處に響きけらく。――

『悪しき快樂受けつる者は

地獄の火焰に汝身を焼けかし。

ウエヌスの山に在りける者は

その身の罪を永久にのがれじ。

わが持つ杖のとしへに

縁の葉をば飾らぬ如く、

地獄の火焰の熱き中より

赦免とはに榮えざるべし。』――

神言を聞くや、身は斃れ

暫時うつけてありけるが、――

眼開きて眺むれば、

四邊寂しきその場所に、

夜はいつしか降り来て、



遠き方より聞ゆるは  
恵を讃むる歌の聲。

聲は楽しく響けども、

われには悪しき心地しぬ。――

此處に恐怖は身を捉へ、

心に深く泌みわたる

つめたき歌を逃るべく、

來る旅路の足ばやに、

此方にわれは向ひけり。――

胸あたゝかう抱かれて、

盡きぬ快樂を身に受けし

此方へわれの誘はれつ。

ナルフرائم

タンホイゼル

ウエヌスよ、神よ、おん許へ  
再びわれは歸り來ぬ。

快樂とこしへほゝゑみて、

われを待つなる魔の夜に、

その家にわれは辿りゆく。

止まり給へ、幸なき者！

止り給へ！

あゝ、いたづらにわれをして

索めしむるな――

嘗ておん身を見いづるに、

あゝ、いかにたやすかりしぞ。

われをば人間の呪へれば、



ナルフラーム

タンホイゼル

この身を誘へおん許へ！  
はしき女神よ！  
迷へる者よ、誰をか呼ぶ？  
はて、そよくと通ひくる  
微風をしも、君覺らすや？

ナルフラーム

タンホイゼル

そは、君にとてぞそよくなる。  
ゆかしき香嗅がなるか？  
樂しき物の音、またも聞かすや？

ナルフラーム

タンホイゼル

怖ろしく胸は震ふよ。  
妖女群れ居て躍るめり。――  
來れ、寄れ、寄れ、快樂に！

ナルフラーム

あゝ、魔のわざは、始まれり。

タンホイゼル

地獄は早く近づく  
あやしの力胸に泌み、  
薄き光をわれは見る。

うれしや、此處ぞ戀の魔國。

ウエヌスのみ山に何時しか着きぬる。

ウエヌス

いざ、わが許に來れかし！  
この身を捨て、行きし身の

あはれ、返はれて、人の世に

愛情をかけん人も無く、

われの愛情に頼らんとて、

またも汝の來れるか？

なさけも厚きわが女神よ！

タンホイゼル



ナルフラーム

おん身が方に身は引かる。  
往け、往け、地獄の魔性。

清き心を惑はすな！

ウエーヌス

愛情を得んとまた君の、わが門近く、寄るならば  
捨てよ、心のほこり。

快樂の泉とこしへに

君に流れん。

わが身の許をとこしへに

逃るゝなかれ、樂人よ！

タンホイゼル

浮世の幸のあらざれば、

この身は擇ばん、地獄の快樂。

ナルフラーム

力あまねきわが神よ！

ウエーヌス

來れ、とこしへに

われがものたれ！

タンホイゼル

われをば離れよ、

ナルフラーム

罪ある者よ！

君が幸福來るべし。

タンホイゼル

否！ 否！ 友よ、わが幸の

この身に廻る時あらじ。

行くべし、されば、わが友よ！

ナルフラーム

天つ使は君の爲に



ウエーヌス

タンホイゼル

ナルフラーム

タンホイゼル

群衆の歌

ナルフラーム

容赦を請ひぬ、地のうへ――

やがてその身は靈失せて、

天國に安くのほるべし。

來れ！ わが許！

來れ！ わが許！

われをおけ！

エリザベト！

エリザベト

心善き少女が體抜けいでて

今、天翔る靈よ、幸あれ！

神の御前にその身を捧げ

恵をいのる天使が願を神の聞きしめし、

ウエーヌス

群衆の歌

ナルフラーム

タンホイゼル

群衆の歌

ハインリツヒよ！  
君が身茲に救はれぬ。

こは、したり！

天つよるこび身に受けて、

神の報酬は授かりぬ。

歌をば君の聞きぬるか？

さなり、その歌われも聞く。

其身を神に捧げつゝ、

尊き群に加はりて、

天つみ國に安居せる

清き少女子、尊しや。

心をこめて少女子が



タシホイセル

年若き巡禮者の歌

願ひし効のあらはれて、  
 その身の罪を赦されし  
 樂人、こゝに幸ありや。  
 さよき少女よ！ わが爲ねがへ！  
 とはに願へよ、わが爲めに！  
 揚げよ、讚へよ、おん恵！  
 讚へよ、揚げよ、おん恵！  
 神の恵の願たれて、  
 罪ある者は救はれぬ。  
 尊く、暗き夜に乘じ、  
 神は不思議と現はれつ、  
 聖者が御手の杖をしも

色あざやかな葉をもちて  
 神は飾りぬ、——されば、また  
 地獄の火もて焼かるべき  
 罪ある者に容赦の  
 花うるはしく咲きぬべし。  
 神のめぐみを身に浴びて、  
 身を救はれし者のため  
 歌はひいくよ、地のうへ。  
 神は天國に知ろしめし、  
 恵を人間に垂れ給ふ。——  
 されば、讚へよ、おん恵！  
 されば、讚へよ、おん恵！  
 されば、讚へよ、おん恵！



一同

神の恵のありがたく、  
罪ある者は救はれぬ。  
眠れる者ともろともに  
彼が心は今安し。

タンホイゼル終

明治四十四年十月十九日印刷  
明治四十四年十月廿五日發行

獨逸文藝第二集付

正價金四拾錢  
郵税金六錢

東京市麴町區飯田町五丁目廿二番地

發行人兼 水谷弓彦

東京市芝區新錢座町十番地

印刷者 齋藤仙吉

東京市芝區新錢座町十番地

印刷所 近藤商店

不許複製

東京市麴町區飯田町五丁目廿二番地

發行所 精華書院

電話番町 一七五七番  
振替東京 四三六六番



オットー、ルウド井ヒ作  
中山口小太郎 清譯

新刊

全一冊

獨逸文藝  
第一

# 脚山守

總クローヌ美本  
正價金六拾錢  
郵税金六錢

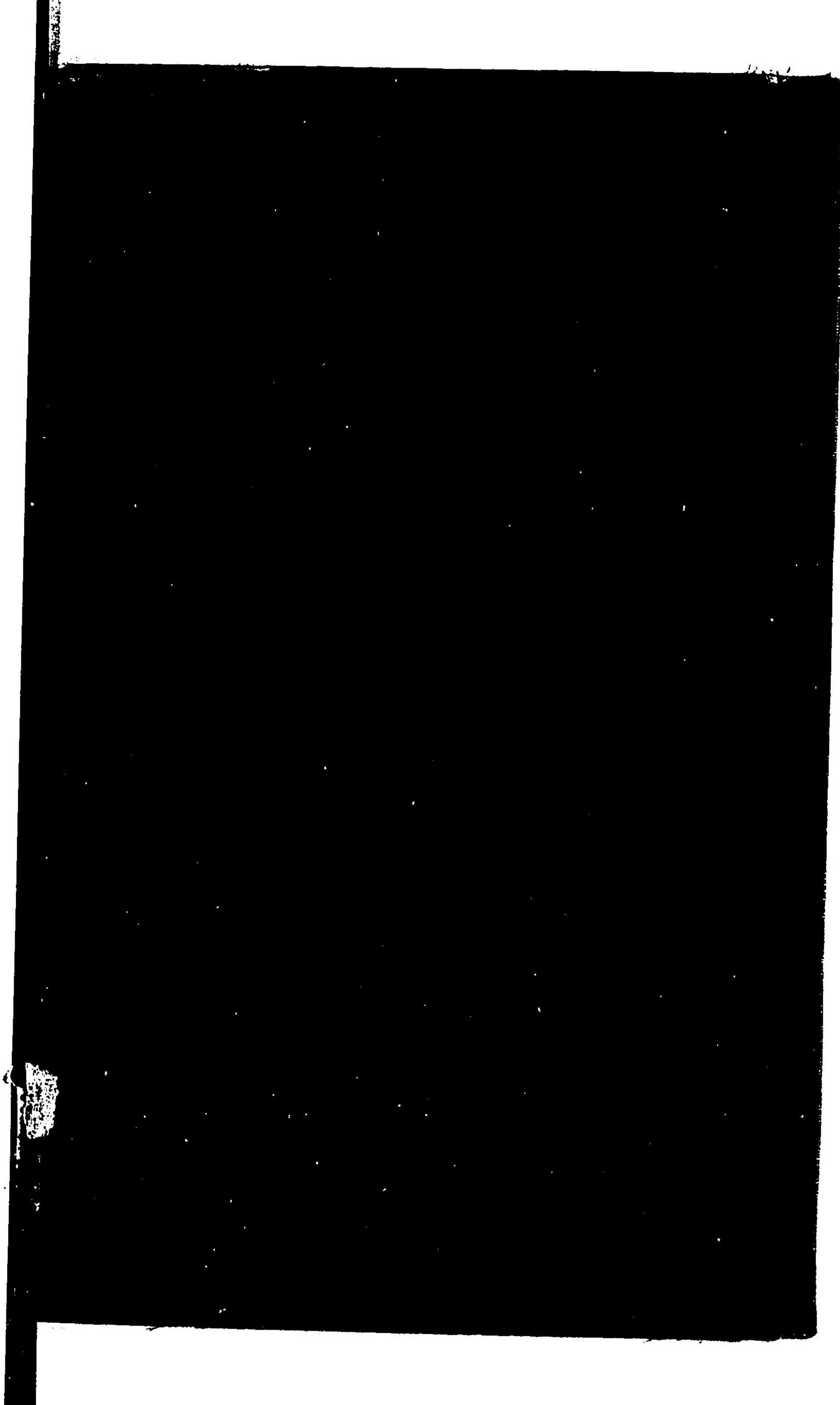
原名 エルプフェルステル (累代山守)

ゾラや、イブセンや、ツルゲニエフや、トルストイや、ハウプトマン、ズウデルマン等の近世文豪が、直ちに世に歓迎せらるゝに反し、半世紀以前に既に陸離たる光彩を残したるヘツベル、ルウド井ヒが、其の生國獨逸に於てさへも、漸く今日に及んで其の眞價を認めらるゝに至りしは奇にあらずや、現代人たるが故に現代に生くるは當然のみ、千八百五十年前後に於て、既に今日の事業を成したる二詩人は偉大なる哉。アドルフ、バルテルスが其の著『近世獨逸文學史』にゲエテ、シルレルの黄金時代に對せしむるに、ヘツベル、ルウド井ヒの銀光時代の榮稱を以てしたるは、過褒にあらず、服装を以て人を評價する者に非るよりは、誰か之を否む者ぞ。——ルウド井ヒの第一傑作は『マツカベエル』なり。今姑く其の第二位たる『Erdforster』を翻し、之を江湖に紹介す(譯者白)



338
47







338  
47

(M)

072617-000-4

338-47

楽劇タンホイゼル

ワグネル/著

M44

CEH-0128





338

47

Ⓜ

藝文逸獨  
二第  
隴書華精